

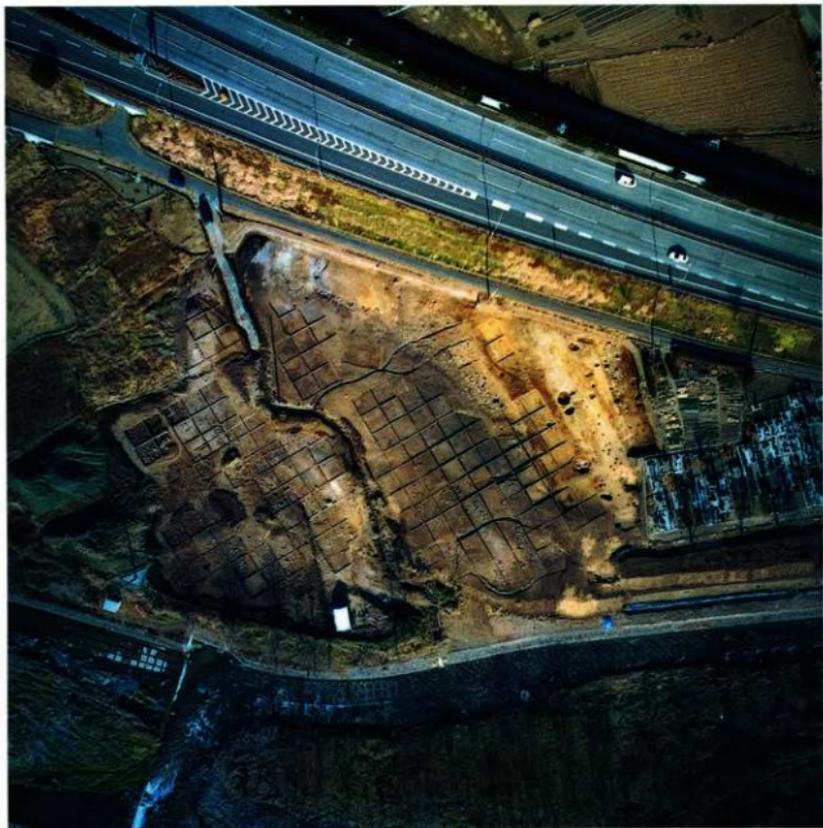
山梨県北巨摩郡須玉町

多 屋 前 遺 跡
TAYAMAE SITE

須玉第一処理場建設に伴う埋蔵文化財調査報告書

2001

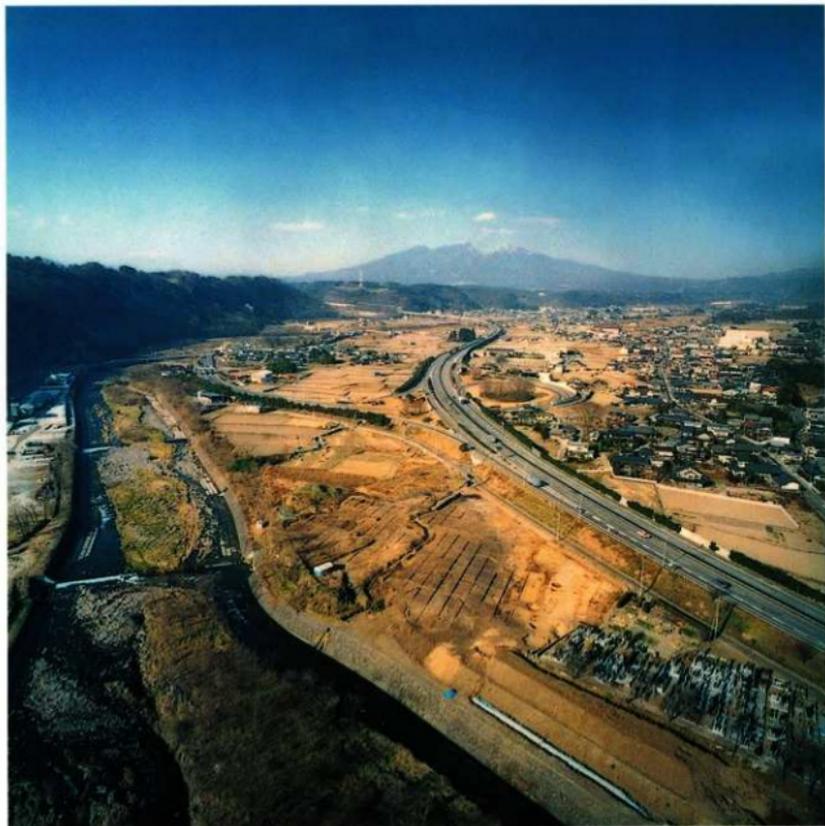
須 玉 町 教 育 委 員 会
韭 崎 土 木 事 務 所



多屋前遺跡全景



北より新府城方面を望む



南より八ヶ岳方面を望む



西より茅ヶ岳を望む

序

須玉町には、たくさんの遺跡があり、過去に多くの調査がおこなわれております。
今回の多屋前遺跡の調査に先立つこと25年前、須玉町での本格的な発掘調査として、隣接している須玉インター付近の大豆生田遺跡が山梨県教育委員会により調査されております。

今回のこの調査でわかった事を後世に伝える為、この報告書を刊行いたしました。本報告書が多方面で活用される事を願っております。

最後に、関係各位の多大なるご理解とご協力によって、本発掘調査事業が推進され完了したことに對して、深く感謝の意を表します。

平成13年3月

須玉町教育委員会 教育長

藤巻 宣夫

例 言

- 1 本書は、仮称須玉町第1処理区浄化センター建設事業に伴って発掘調査した、山梨県北巨摩郡大豆生田字多屋前地内に所在する多屋前遺跡の調査報告書である。
- 2 発掘調査は、須玉町教育委員会が主体となり実施した。
- 3 本文の執筆は、山路恭之助、深沢裕三が行った。
- 4 本調査の出土品、諸記録は、須玉町教育委員会が保管している。
- 5 本調査にあたり、下記の方々、機関からのご協力、ご教示を頂いた。記して感謝申し上げたい。

(敬称略)

葦崎土木事務所、山梨県教育委員会学術文化課、八巻与志夫、中山誠二
山梨県埋蔵文化財センター 新津健 保坂康夫

6 調査組織

調査主体	須玉町教育委員会	教育長	碓井正明(発掘調査時)
			藤巻恒夫
事務局	須玉町教育委員会		藤原良一(発掘調査時)
調査担当	須玉町教育委員会	文化財係	山路恭之助
調査員	深沢裕三		

- 7 遺物の復元、接合、注記は、浅川英光、望月小夜子、岡本英史、岡本文美が行い、実測・トレース及び図面作成は岡本美恵子、小尾裕美子、浅川佐知子、岡本英史、岡本文美、早川慶が行った。
- 8 発掘調査参加者 浅川文三、松林新一、浅川英光、松田かね代、山口か志子、宮崎房子、篠原昭子、中田千秋、花輪照子、清水波子、吉本勝美、丸山武雄、小沢安子、宮崎織
- 10 遺構および遺物の挿図中の縮尺は下記のとおりである。
遺構 土坑：1/300 暗渠：1/300 全体図：1/800
遺物 土器：1/1 1/2 1/4 磁器：1/2 古銭：1/1

目 次

序 例言 目次

第1章	調査の実施と経緯	
	(1) 調査に至る経緯と経過	1
第2章	遺跡の環境	
	(1) 地理的・歴史的環境	2
第3章	調査概要	
	(1) 調査の概要	7
	(2) 遺構	7
	(3) 遺物	14
	参考資料	22

挿図目次

第1図	遺跡位置図	3
第2図	遺跡立地図	4
第3図	立地詳細図	5
第4図	遺跡全体図	6
第5図	土坑図	9
第6図	暗渠1	11
第7図	暗渠2	12
第8図	暗渠3	13
第9図	出土遺物 (縄文時代) -1	16
第10図	出土遺物 (縄文時代) -2	17
第11図	出土遺物 (弥生時代) -1	18
第12図	出土遺物 (弥生時代) -2	19
第13図	出土遺物 (古墳時代) -1	19

第14図 出土遺物（平安時代）-1	19
第15図 出土遺物（平安時代）-2	20
第16図 出土遺物（中世・近世）-1	20
第17図 出土遺物（中世・近世）-2	21

表目次

第1表 土坑の形状と規模	8
第2表 暗渠の長さ及び幅	10
第3表 出土遺物表-1	31
出土遺物表-2	32

図版目次

巻頭図版 多屋前遺跡周辺航空写真

写真図版1	1. 発掘風景 -1	25
	2. 発掘風景 -2	25
	3. 発掘風景 -3	25
	4. 土坑 -1	25
	5. 土坑 -2	25
写真図版2	1. 暗渠 -1	26
	2. 暗渠 -2	26
	3. 注口土器出土風景 -1	26
	4. 注口土器出土風景 -2	26
写真図版3	出土遺物（縄文時代）-1	27
写真図版4	出土遺物（縄文時代）-2	28
	（弥生時代）-1	28
写真図版5	出土遺物（古墳時代）-1	29
	（平安時代）-1	29
	（中世・近世）-1	29
写真図版6	出土遺物（中世・近世）-2	30

第1章 調査の実施と経緯

(1) 調査に至る経緯と経過

平成9年5月6日付により葦崎土木事務所より下水道終末処理場建設の予定地における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて、須玉町教育委員会に照会があり、平成9年12月24日から3日間の間に予定地区の試掘調査を実施した結果、ほぼ全域にわたり縄文及び平安時代と中世の遺物が確認され、集落跡や城館跡が存在すると考えられた。平成10年1月12日付けにて葦崎土木事務所長より土木工事に先立ち文化財保護法第57条の3第1項の規定による通知が文化庁長官宛にだされる。同年3月2日県教育委員会より工事着手前に発掘調査を実施する旨の「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について」の通知が葦崎土木事務所長宛にだされる。葦崎土木事務所、須玉町、須玉町教育委員会による協議の結果、同年4月2日付けにて「須玉第一処理場建設に伴う埋蔵文化財協定書」が葦崎土木事務所長、須玉町長とで締結され須玉町教育委員会が平成10年度現地での発掘調査、平成11年度整理作業、平成12年度報告書作成を実施する事となった。調査は協定に基づき平成10年4月20日より予備調査を開始し、6月より重機による表土の除去作業を開始した。遺構面までの深さが平均80センチ前後あり作業は予定より時間がかかった。

不要土の除去をしながら、公共座標による5メートルの調査グリッドを設定しながら人力による発掘調査を7月中旬より開始した。調査期間の延長にともない調査終了日を平成11年1月20日に変更するため、平成10年11月30日付けにて協定の変更をおこない現地での発掘調査を終了した。

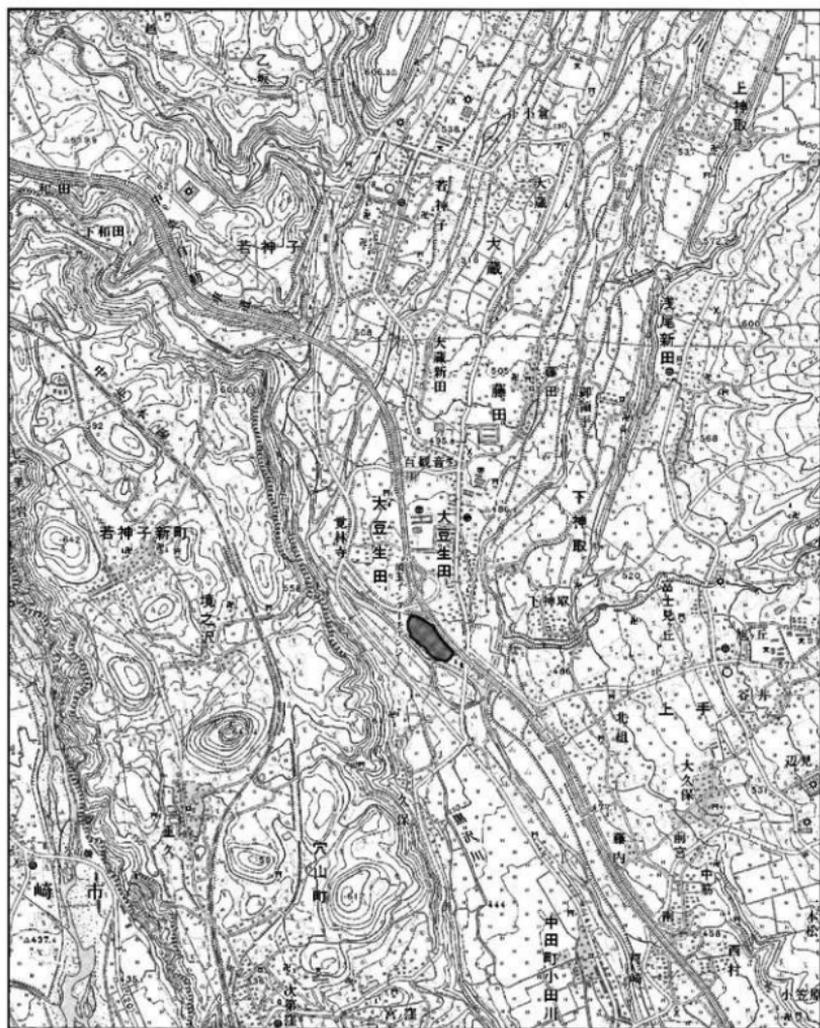
第2章 遺跡の環境

(1) 地理的・歴史的環境

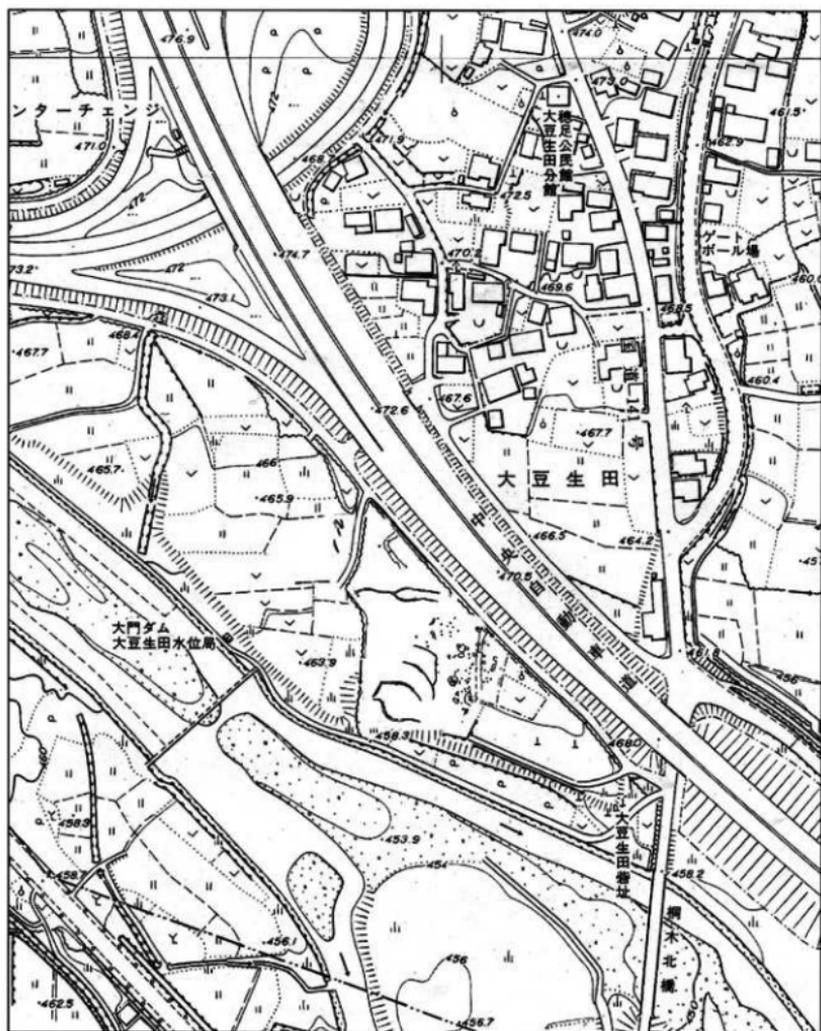
多屋前遺跡は、山梨県北巨摩郡須玉町大豆生田字多屋前に所在する。金峰山、瑞牆山の陰阻を流下する塩川と、八ヶ岳の峻隘から流れ出す甲川と鳩川が合流する須玉川との両河川に挟まれた河川敷上に位置し、須玉川の中洲との比高差10mの段丘状で標高は464mが測られる。歴史的にこの辺りは平安時代の柏前、真衣野、穂坂の三官牧を掌握できる地理にあり、10世紀に盛んに行なわれた駒牽にも関わりが濃い地と推定されている。又、塩川と須玉川の両河岸に挟まれた肥沃な土地から収穫した稲米を蓄積した蔵（屯倉）推定地とする大蔵、小倉がここに地名として残る。大和朝廷の直轄領に関する地名は他にも塩川の右岸、明野村の御領平がある。多屋前遺跡が所在する地は、天正10年北条氏直と徳川家康とが甲斐領有を巡る戦いで桐ノ木に布陣する徳川方に対峙して、北条方が立てこもった大豆生田砦（島崎城）の跡地とされ、「北巨摩郡誌」には「新府落城の砌、徳川氏の兵のために落さると云う。」とある。（須玉町史第一章考古第4節穂足地区の遺跡より）



発掘風景

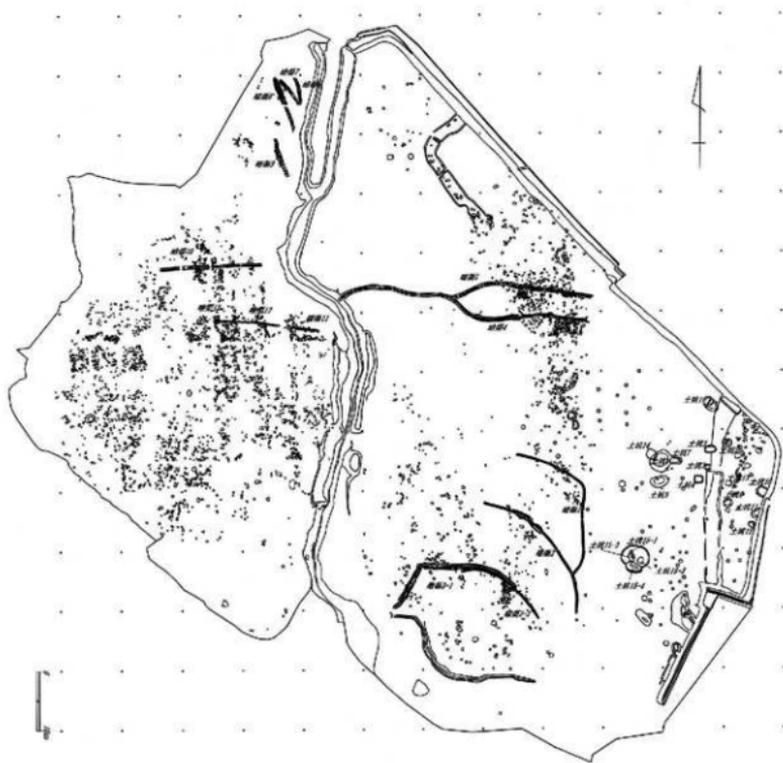


第2図 遺跡立地図 (1/25000)



0 50m 100m

第3図 立地詳細図 (1/2500)



第4図 遺跡全体図

第3章 調査概要

(1) 調査の概要

浄化センター設立に伴う発掘調査範囲は、多屋前の集落から中央道の下を横切って北から南へ流れる幅3m～4mの小河川(堰)によって東西に二分される。約15000m²の調査面積の内、調査対象面積は西約2700m²、東約3800m²強である。土坑群が検出されたのは調査対象区の最東端で、桐ノ木橋を見下ろす丘上の御題目塔まで続く墓地境の南北50m×東西25m、1250m²の範囲内からで、大小16基の土坑と地下式坑と見まかなう大形の攪乱2ヶ所が検出されている。土坑が穿かれる以前に2本の溝(小河川)があった事が判明した。堰の西区域から短い暗渠が8条、東区域から6条の暗渠が検出された。

(2) 遺構

I 土坑

大小16基の土坑が検出されたのは、調査区域の東に当る東西25m、南北50m(1250m²)の範囲内で、形状と規模は(第1表)に表示した。土坑No1～6は重複のない単独の土坑だが、大形土坑ではNo8をNo7とNo14が切っている。No9～13も重複しない土坑だが、No10と11、12は一部が調査外に占地するため遺構の全容を把握できなかった。No9の覆土中層から五輪搭の宝珠が出土した。大形土坑No15は壁が10～15cmと深く、立ち上がりが緩い摺鉢状を呈し、埋没後に順序は判らないが、4つの土坑が次々に掘られたようである。中央のNo15-2は乳白色で砂利を多く含み、覆土の底は礫の集石が認められる。土坑No15の南に舟底状の底部をもつ長楕円の土坑No16は、褐色の覆土に礫が混入していた。土坑No16から東へ5m離れて1ヶ所と、南へ約10m離れて1ヶ所、それぞれ幅5mの落ち込みが墓地のコンクリート壁の下へと続く。

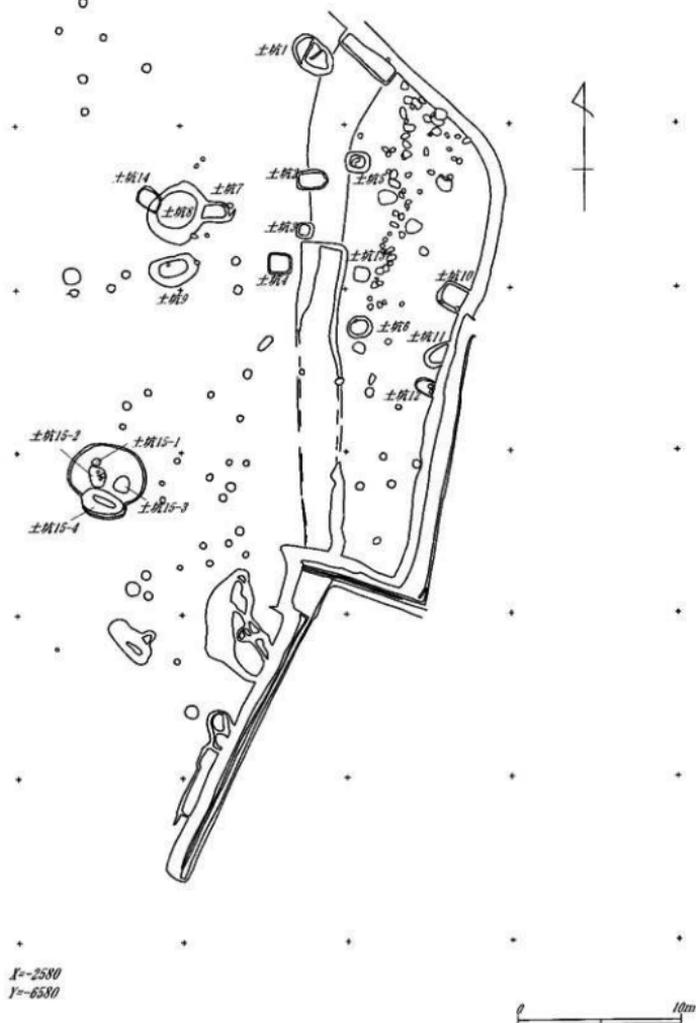
II 暗渠

No1とNo2は調査区域の南東で検出された土坑群から約10m西に離れた位置にあつて、No1はNo2の約20mの地点で合流している。No3は、No2から10m南に位置し、半円状に構築され、末端は塩川へそそぐ小河川の崖上まで続く。No4とNo5は調査区域の北側に位置し、東から西へ構築されたNo5の中央辺りにNo4が合流している。No5の末端は調査区中央を南北へ流れる小河川につながる。No6～9は最も北に位置し、5m×15mの狭囲の中に短い4本の暗渠が認められた。No10は、No5より小河川を挟んでやや北側に位置し、No11、12、13は、No10と平行して検出された。もともと3本は1本の暗渠と思われるが、途中で完全に切れているため、分けてみた。暗渠の長さについては(第2表)に記す。

第1表 土坑の形状と規模（単位cm）

上坑No	平面形状	規模	深さ	拡底部形状	備考
1	長楕円形	280×180	50	立ち上り緩く摺鉢状を呈する	
2	長方形	180×100	30	掘り込み浅い	
3	円形	100×90	50	摺鉢状を呈する	
4	方形	120×120	25	掘り込み浅い	
5	長方形	280×130	45	摺鉢形	
6	楕円形	135×120	35	摺鉢形	底部よりやや浮いた状態で注口土器出土
7	長方形	190×70	30	立ち上り緩い	
8	楕円形	270×300	65	摺鉢形	
9	不整長形	250×170	90	摺鉢形	
10	方形	155×150	40	摺鉢形	
11	長楕円形	(180)×110	40	立ち上り緩い	
12	長楕円形	(125)×90	20	掘り込み浅い	
13	方形	85×80	38	立ち上り緩い	
14	楕円形	120×115	40	摺鉢形	
15	円形	460×460	10~15	立ち上り緩い	
15-1	円形	40	40	立ち上り浅い	黒褐色
15-2	楕円形 不整円形	120×100	35	掘り込み急	集石 中心部 乳白色で砂粒子が多い土
15-3	不整円形	100×85	20	掘り込み浅い	黒褐色
15-4	楕円形	250×130	80	摺鉢形	一層 褐色土 二層 黒褐色 底、礫
16	長楕円形	300×140	70	摺鉢形	

X=25790
Y=6460



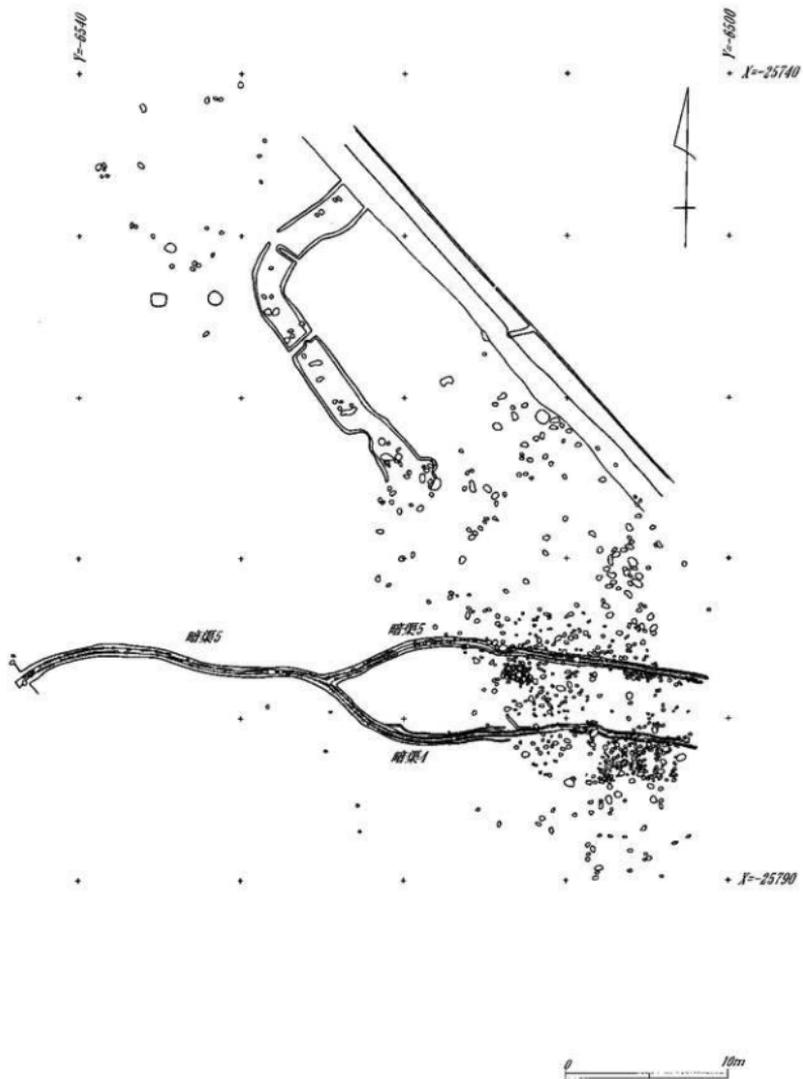
第5圖 土坑圖

第2表 暗渠の長さ及び幅 (単位m)

No	長さ	幅	始点～終点
1	27.9	0.25	X=-25800～X=-25825 Y=-6515～Y=-6505
2	26.5	0.25	X=-25810～X=-25835 Y=-6520～Y=-6505
3-1	31.8	0.25	X=-25830～X=-25835 Y=-6510～Y=-6535
3-1	8.0	0.25	X=-25830～X=-25825 Y=-6515～Y=-6520
4	24.5	0.40	X=-25780～X=-25775 Y=-6500～Y=-6525
5	43.5	0.35	X=-25775～X=-25775 Y=-6500～Y=-6545
6	5.5	0.40	X=-25740～X=-25740 Y=-6550～Y=-6550
7	5.6	0.40	X=-25740～X=-25740 Y=-6550～Y=-6550
8	9.8	0.55	X=-25740～X=-25750 Y=-6555～Y=-6550
9	6.8	0.45	X=-25750～X=-25755 Y=-6575～Y=-6550
10	16.85	0.40	X=-25770～X=-25770 Y=-6575～Y=-6550
11	17.9	0.35	X=-25780～X=-25780 Y=-6555～Y=-6545
12	6.6	0.30	X=-25780～X=-25780 Y=-6660～Y=-6555
13	6.0	0.50	X=-25780～X=-25780 Y=-6565～Y=-6560



第6図 暗渠1



第7図 暗渠2

Y=6500

Y=6540

X=25740



X=25790

0 10m

第8図 暗渠3

(3) 遺物

I 縄文時代

前期初頭 繊維土器片(1)(6)(2)

前期後半 諸磯C式土器片(3)(4)

中期末 「ハ」の字文の胴部片(10)(9)(5)(12)
綾杉状細沈線文を地文とする胴部片(13)

後期初頭 1)8字文が遺る深注口縁部破片(7)
2)小形壺か、注口土器の口縁か(11)
3)大きく開口する四つの波状口縁と丸く張った胴部からなる深鉢で、一部波状口縁を欠損するものの殆んどは、破片ばかりの出土遺物の中で、完形に近いものである。(14)(口径 15.5 底径 4.8 器高15.0)

晩期 1)土坑No6の覆土内で、横臥状で出土した注口土器は注口部を欠除するものの、器体は底に一部を欠いているが完形に近い。口径17.6cm、低11.6cm、器高31.5cmで、把手はなく、最大径は胴で22cmが測られ、形状は広口壺で、外周はヘラ磨きで黒褐色を呈する。(15)T字文を施した氷式鉢口縁部(8)

II 弥生時代

四本単位の棒状浮文がつく壺形土器の口縁片は千曲川水系の箱清水式に比定できる。(16)(19)壺形土器の頸部片で波形沈線文(17)(23)の他に(21)(20)(22)(18)(24)(25)、口縁下に籐状文があるものは(26)(27)(29)である。

III 古墳時代

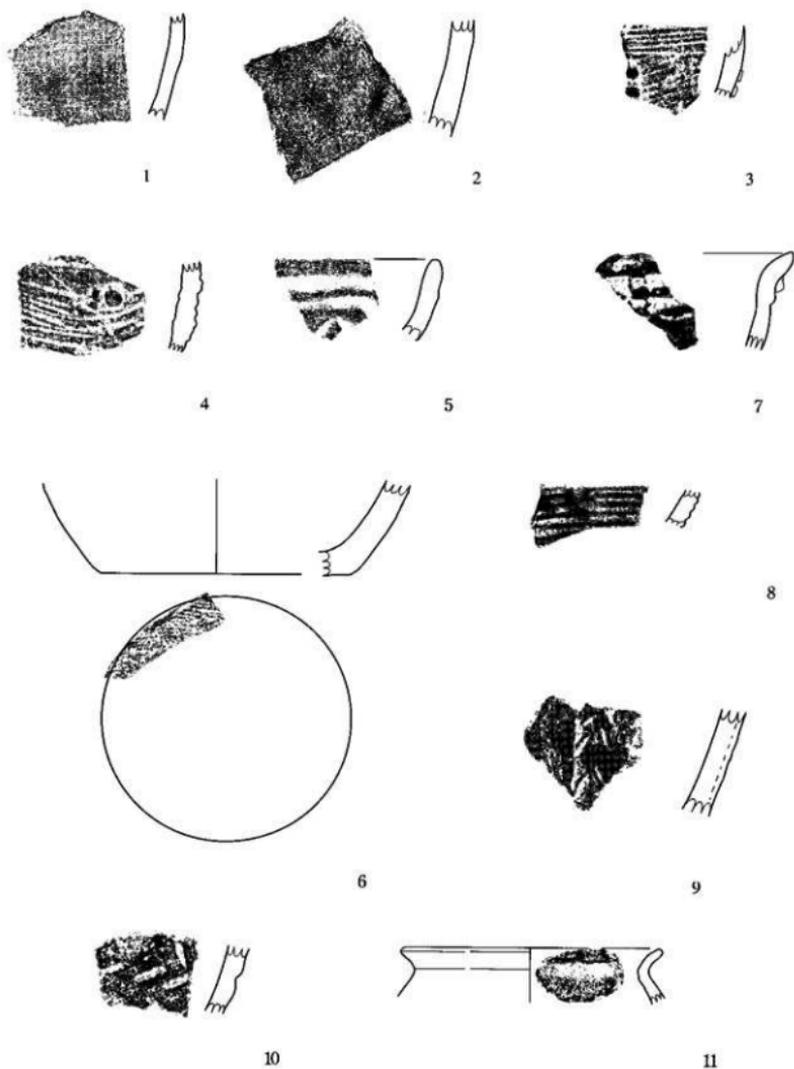
大泉村姥神遺跡30号住から出土したものと類似するS字カメ(30)、土師器の器台(31)がある。

IV 平安時代

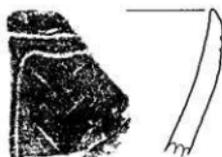
甲斐型カメ胴部片(35)(36)、底部片(38)、須恵器胴部片(34)、在地系内黒土器片(33)、甲斐型内黒土器片(32)、(37)は朝廷用の腰帯具(丸鞆)で9世紀から10世紀皇族以下の文官が朝廷に出仕する時に着用する正服の腰帯につける飾りとして、長方形の巡方と楕円形に似た丸鞆を、帯の中間に配置する。身分によって着物の色、模様、帯につける飾りの材質や大きさまでも決められていた。当遺跡から出土した丸鞆を見つけていた人物は地方役人だったのか、或いは朝廷にかかわる人から貰ったものなのか不明である。

V 中世～近世

- 1) (52)天禧通宝 A.D.1017～21北宋銭
(44)コバルトの濃い松と亀甲紋の磁器片
- 2) (53)中世古銭では皇宋通宝 A.D.1088(鑄造年代)北宋銭
(40)摺鉢片
(46)銅版転写による染付け皿片
- 3) (51)天目茶碗片
(45)染付け磁器底部片で見込みに手書きによる「寿」がある。
(43)陶器片で網目文を施した碗片
(50)見込みに釉剥ぎの蛇の目が認められる陶器片
- 4) (39)18世紀から明治以降まで続く染付け皿の蛇の日凸形高台片
(41)徳利、菊花の染付け湯のみ、(42)染付け碗の破片



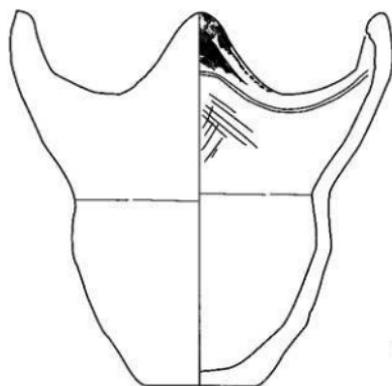
第9図 出上遺物（縄文時代）-1



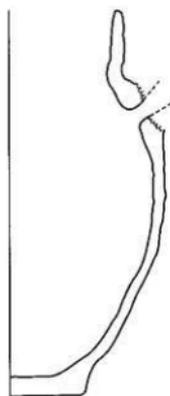
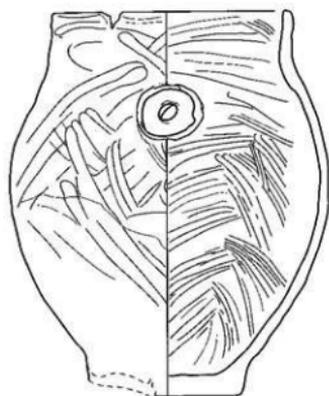
12



13



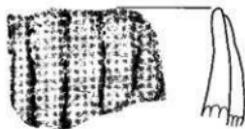
14



15



第10圖 出土遺物（縄文時代）-2



16



17



18



19



20



21



22



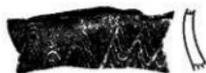
23



24



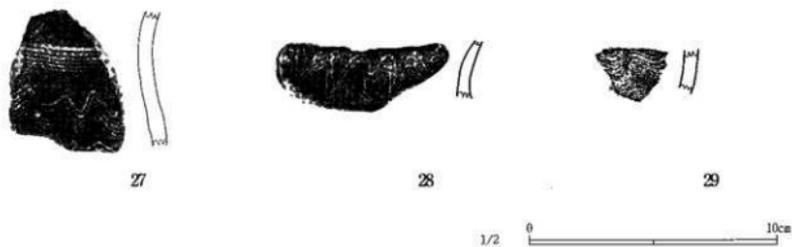
25



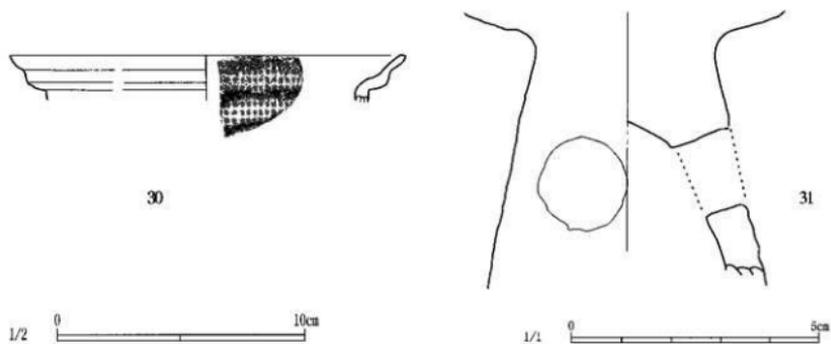
26



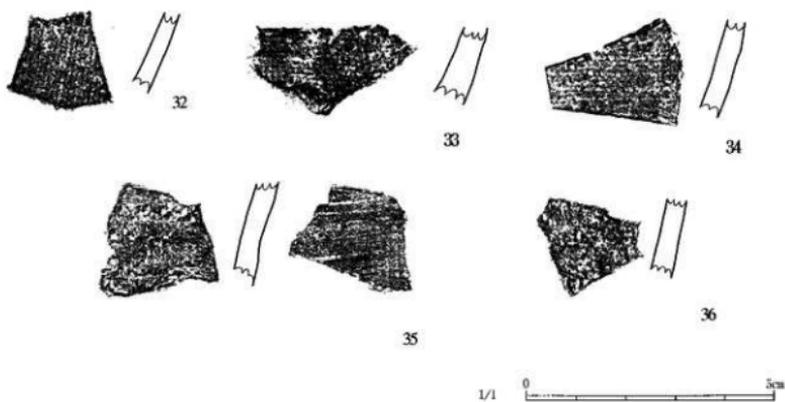
第11图 出土遺物(弥生時代)-1



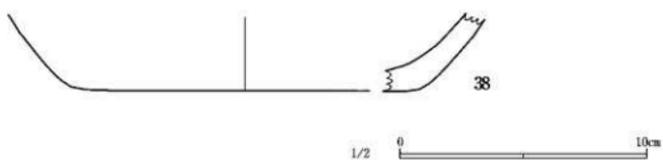
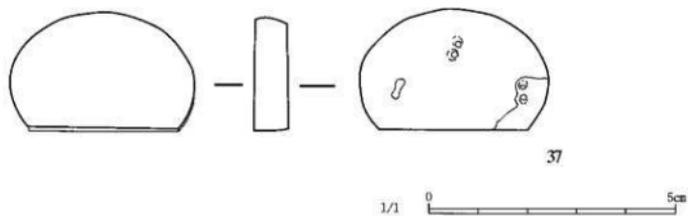
第12図 出土遺物(弥生時代)-2



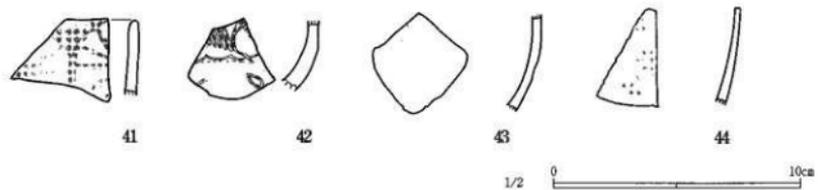
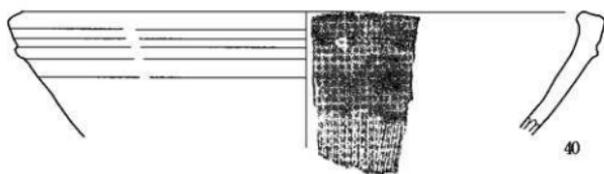
第13図 出土遺物(古墳時代)



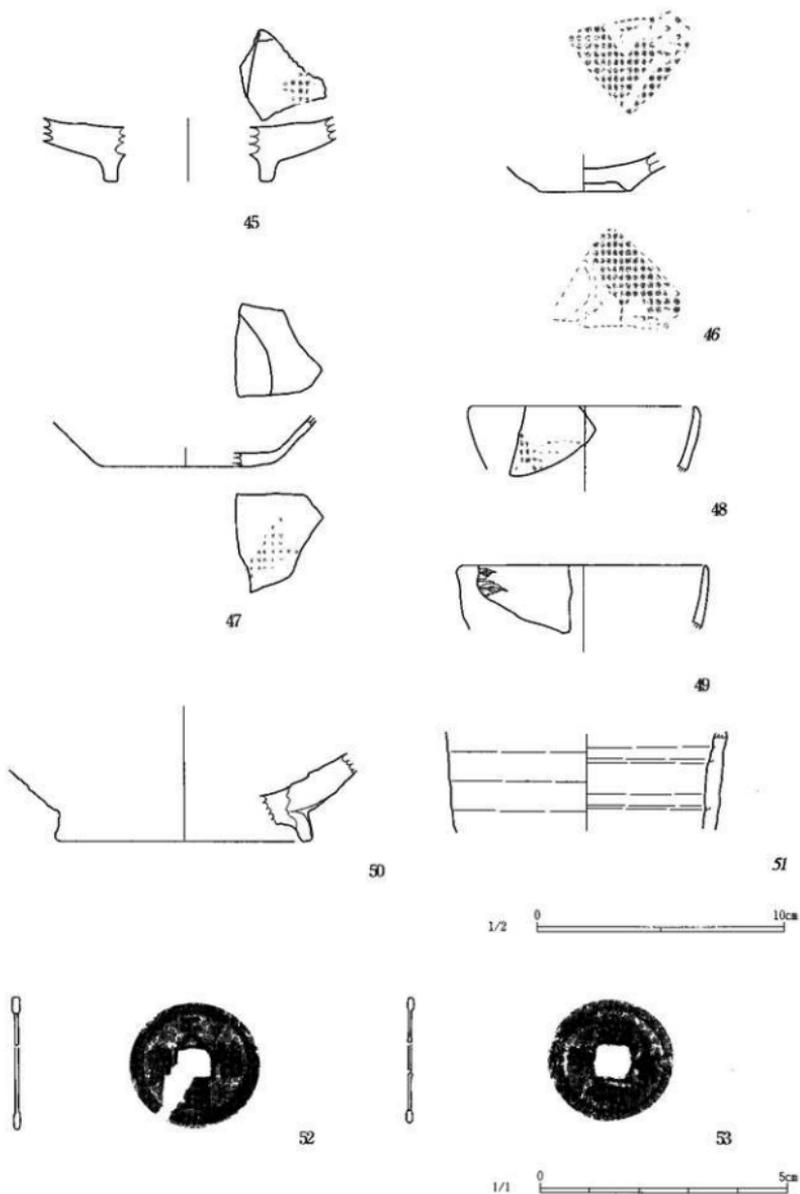
第14図 出土遺物(平安時代)-1



第15图 出土遺物（平安時代）-2



第16图 出土遺物（中世・近世）-1



第17图 出土遺物（中世・近世）-2

天正壬午の乱

(てんしょうじんごの乱 北条氏 vs. 徳川氏 天正10年(1582)7月~10月末)

戦国時代、甲斐武田氏は中部・駿河地方の大部分の覇権を握っていたが、天正元年4月に信玄が病死すると、甲斐の地は近隣の武將たちの侵略の的となった。信玄を継いだ勝頼は天正3年5月の長篠の戦いで徳川家康・織田信長連合軍に大敗すると甲斐に戻って態勢を立て直しをはかった。信濃方面から織田軍、駿河方面から徳川軍、そして関東方面から北条軍が甲斐に攻め入る勢いであった。そこで勝頼は葦崎に近い新府へ城を移して(同9年)防衛態勢を整えた。しかし、勝頼の義弟の木曾義昌が信長に寝返ると態勢は一気に織田・徳川・北条軍に有利となった。次々と他の家臣達も織田軍へ寝返り信濃は戦わずして織田の勢力下に陥った。織田軍が諏訪方面から国内に迫ってくると勝頼は自ら新府城に火を放って(同年3月3日)岩殿城(大月市)へ向け背走した。しかし、篁子峠で背反した家臣の小山田信茂に阻まれ、ついに天正9年3月11日勝頼は自害してここに武田家が滅亡した。

その後甲斐は一時、織田家臣の河尻秀隆に治められたが、天正10年6月2日京都の本能寺で織田信長が家臣の明智光秀に殺されると、北条氏と徳川氏が旧武田領(主に甲斐と信濃)をめぐる争うことになった。これが天正壬午の乱である。北条軍二万は若神子に陣を張り、一方家康は新府城に本陣を張って双方が向かい合う状態になった。この時、津金衆をはじめとする武田の旧家臣たちは家康側についた。防御を固めていた徳川軍を攻めきれない北条軍は富士山に近い御坂城から甲府を攻め、南北から徳川を挟み撃ちにする作戦に出たが、黒駒の合戦で北条軍は大敗し、逆に徳川軍は信濃側から北条の補給路を断ち態勢が逆転し始めた。

80日あまりの膠着状態の末、北条氏直が徳川方に和ぼくを申し出て撤退。甲斐と信濃は家康の所領となり、家康の天下制覇への道が開かれることになった。

資料 『図説 葦崎・巨摩の歴史』 郷土出版社 2000

『日本城郭大系第8巻 長野・山梨』 創史社編 1980



3ヵ所の若神子城

甲斐源氏の祖である源義光（みなもとのよしみつ）伝承の城。戦国時代には武田軍が諏訪侵攻のうちに宿営した記録がある。天正壬午の乱では北条氏の軍勢が陣を張った。現在古城跡は公園として整備され烽火（のろし）台が復元されています。発掘調査では薬研堀や箱堀などが発見されましたが、これらは義光の時代のものではなく天正年代のものと思われる。



獅子吼城は塩川沿いにある標高793mの「江草富士」とも呼ばれる円錐形の城山です。北条軍がここに立てこもったけれど、徳川の服部半蔵率いる伊賀組を中心に旧武田家の家臣であった津金衆や小尾衆らの夜襲によって落城された。

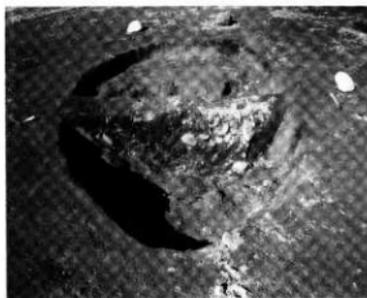


大豆生田砦跡（多摩前遺跡・中央自動車道須玉インター付近）

写 真 图 版



1 発掘風景-1



4 土坑-1



2 発掘風景-2



5 土坑-2



3 発掘風景-3



1 暗渠-1



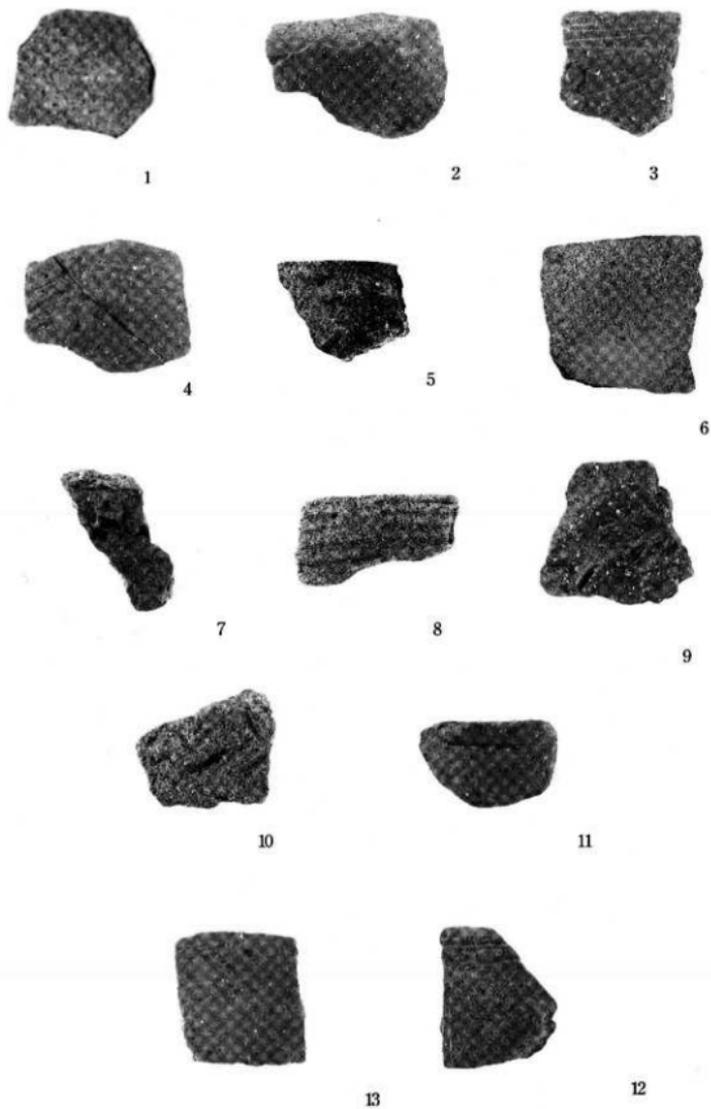
2 暗渠-2



3 注口土器出土状況-1



4 注口土器出土状況-2



出土遺物（縄文時代）-1



14

15

出土遺物（縄文時代）-2



16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26



27



28



29

出土遺物（弥生時代）



30



31

出土遺物 (古墳時代)



32



33



34



35



36



38



37

出土遺物 (平安時代)



39

出土遺物 (中世・近世) -1



40



41



42



43



44



47



48



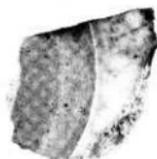
49



45



46



50



51



52



53

第3表 出土遺物表-1

縄文時代観察表

挿入 番号	遺物 番号	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 厚さ (cm)	色調	胎土	備考
9	1	土器	-	-	-	-	灰赤褐色	白色粒子・雲母	
9	2	土器	-	-	-	-	明赤褐色	白色粒子	
9	3	土器	-	-	-	-	茶褐色		
9	4	土器	-	-	-	-	黒赤褐色		
9	5	土器	深鉢	-	-	-			
9	6	土器	-	-	-	-	明褐色	白色粒子	
9	7	土器	深鉢	-	-	-	明褐色	白色粒子・雲母	
9	8	土器	浅鉢	-	-	-	灰黄褐色	白色粒子	
9	9	土器	深鉢	-	-	-	明褐色	白色粒子	
9	10	土器	深鉢	-	-	-	明黄褐色	白色粒子	
9	11	土器	壺	10.4	-	-	赤褐色		
9	12	土器	-	-	-	-	明褐色		
9	13	土器	-	-	-	-	暗褐色	白色粒子・雲母	
10	14	土器	深鉢	15.5	4.8	15.0	灰黑色		ほぼ完型
10	15	土器	注口	17.6	11.6	31.5	黒褐色		ほぼ完型

弥生時代観察表

挿入 番号	遺物 番号	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 厚さ (cm)	色調	胎土	備考
11	16	土器	壺	-	-	-	明赤褐色		
11	17	土器	壺	-	-	-	茶褐色		
11	18	土器	注口	-	-	-	灰褐色		
11	19	土器		-	-	-	明褐色	白色粒子・雲母	
11	20	土器		-	-	-	暗茶褐色	白色粒子	
11	21	土器	深鉢	(15.8)	-	-	明褐色	白色粒子・雲母	
11	22	土器		(9.6)	-	-	暗赤褐色	白色粒子	
11	23	土器	壺	-	-	-	暗灰褐色		
11	24	土器	壺	-	-	-	黄褐色		
11	25	土器		-	-	-	にぶい橙色		
11	26	土器	甕	-	-	-	灰黄褐色		
12	27	土器		-	-	-	明褐色		
12	28	土器		-	-	-	灰黄褐色		
12	29	土器		-	-	-	黒褐色	白色粒子・雲母	

第3表 出土遺物表-2

古墳時代観察表

押図番号	遺物番号	種別	器種	口径 (c m)	底径 (c m)	器高 (c m)	色調	胎土	備考
13	30	土器	台付甕	(16)	-	-	黄褐色		
13	31	土師器	高台付坏	-	-	-	赤褐色		

平安時代観察表

押図番号	遺物番号	種別	器種	口径 (c m)	底径 (c m)	器高厚さ (c m)	色調	胎土	備考
14	32	土師器		-	-	-			
14	33	土器		-	-	-	灰褐色		内黒土器
14	34	須恵器		-	-	-			
14	35	土器	甕	-	-	-	黄褐色		
14	36	土器		-	-	-			
15	37	石器		3.7	2.5	0.7	琥珀色		腰帯具 (丸柄)
15	38	土器		-	(14.0)	-			

中世～近世観察表

押図番号	遺物番号	種別	器種	口径 (c m)	底径 (c m)	器高厚さ (c m)	色調	胎土	備考
16	39	磁器	皿	-	(15.4)	-			
16	40	磁器	摺鉢	(24)	-	-	明褐色		
16	41	磁器		-	-	-			菊花
16	42	磁器		-	-	-			
16	43	磁器	碗	-	-	-			
16	44	磁器		-	-	-	コバルト染 い		松と亀甲紋
17	45	磁器	碗	-	(6.7)	-			見込みに手書き 「寿」
17	46	磁器		-	(3.7)	-			
17	47	磁器		-	(7.0)	-			胴下部舟
17	48	磁器		(9.0)	-	-			
17	49	磁器		(10.0)	-	-			
17	50	陶器		-	(9.6)	-			
17	51	陶器		-	-	-			鉄質黒陶釉を施している

押図番号	遺物番号	種別	直径 (c m)	孔径 (c m)	厚さ (c m)	重さ (g)	備考
17	52	古銭	2.5	0.7	0.15	2.5	天福通宝 A.D.1017～1021 (鑄造年代) 北条銭
17	53	古銭	2.5	0.7	0.15	2.5	皇宋通宝 A.D.1088 (鑄造年代) 北条銭

報告書抄録

ふりがな	たやまえいせき
書名	多屋前遺跡
副題	須玉第一処理場建設に伴う埋蔵文化財報告書
シリーズ名	
編著者名	山路恭之助 深沢裕三
発行者	須玉町教育委員会
編集機関	山梨県須玉町教育委員会
所在地.電話	〒408-0112 山梨県北巨摩郡須玉町若神子1429 TEL0551-20-6111
印刷所	株式会社 ヨネヤ
発行日	平成13年3月30日
所在地	山梨県北巨摩郡須玉町大豆生田字多屋前293-1ほか
	25,000分の1地形図 若神子
	位置 東経138°25'42" 北緯35°46'1" 標高454.4
	市町村コード 194034
調査原因	下水道終末処理場建設
調査期間	平成10年4月20日～平成11年1月20日
調査機関	須玉町教育委員会
調査面積	9,400㎡
時期	縄文時代、弥生時代、古墳時代、中世.近世
主な遺構	暗渠、土抗
主な遺物	縄文土器、土師器、磁器
特記事項	

多屋前遺跡

-須玉第一処理場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査-

平成13年3月30日

編集 須玉町教育委員会
 発行 須玉町教育委員会
 印刷 株式会社ヨネヤ

